

コンディヤックの記号概念 —松永澄夫氏のコンディヤック関係二論文によせて—

飯野和夫

はじめに

コンディヤックをはじめとする感覚論者たちは、感覚能力に人間精神の諸機能の芽が含まれていると考え、そうした諸機能、とりわけ知性の成長発展過程を分析しようとした。その際、コンディヤックは、記号が特に重要な役割を果たすと考えた。知性は記号を媒介として発展していくと考えられたのである。筆者は先の論文「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描——『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して——」⁽¹⁾において、コンディヤック『人間知識起源論』（以下、『起源論』と略す）で展開される人間知性の発展を論じた。人間知性の発展には、感覚から知性の獲得に至る発展に加えて、知性が形成された後の知性の高次の展開も考えられるのではないかと指摘するとともに、記号はこの二つの過程のどちらにも決定的な役割を果たすことを指摘した。ただし、先の論文は記号それ自体を主題にしたものではないため、記号については、『起源論』の範囲内でも論じていない点が多々ある。そこで、本論文では『起源論』における記号概念をあらためて検討したい。

ところで、コンディヤックの記号論については、日本語による松永澄夫の優れた研究、「コンディヤックの記号論」（1991年）⁽²⁾と「記号における運動の発見」（1992年）⁽³⁾の二論文がすでに存在する。これらの論文は、松永がコンディヤックの記号論を語りながら、その強靱な思考によって自身の記号論を展開しようとしている点でも興味深い。本論文では、『起源論』で論じられている範囲において、上記拙論で検討した人間知性の発展の文脈に、記号の働きを重ねてみたい。その際、コンディヤックの記号論についての考察は、多くの部分をこの松永の論考に負っている。知性の発展についての筆者の考察の文脈に松永の議論を位置づけることで、松永の議論にあらためて光を当て、全体としてコンディヤックの記号論についての理解を深めることができればと思う⁽⁴⁾。

1. 観念連関、記憶、記号、観念

筆者は上記の論文で、コンディヤックの『起源論』で展開される、人間知性の発展過程を再構成した。本論文においても、記号を位置づけるために必要な範囲で、知性の発展過程を再確認しながら進める。そのため引用と論述がしばしば上記論文と重なることを了承願いたい。さて、コンディヤックは『起源論』第I篇第II部第II章「想像、観

想、記憶について」で知覚相互には「連関」が形成されることを次のように指摘している。

「経験の教えるところでは、注意〔という働き〕の最初の結果は、もの〔实在の対象〕(objet) が引き起こした知覚を、ものがなくなった時にも精神の内に残存させることである。ふつうこれらの知覚は、ものが現にあった時にそれらが有していた秩序と同じ秩序にしたがって精神の内保存される。それによって、これらの知覚相互に連関 (liaison) が形成される」(I-II-II-17) ⁽¹⁾。

これから明らかになろうが、知覚も広義の観念であり、ここに現れる「連関」は、後段で「観念連関」とされるものと基本的に同じものと考えてよい。従って、本来、連関は記号とは無関係に形成されることになる。上の引用箇所のすぐ後では、知覚の「連関」から「想像 imagination」の働きが生じるとされる。

「注意はある知覚とあるもの〔の知覚〕のあいだに連関を打ち立てるが、同じものを〔たとえば〕見かけると、この連関の力だけで元の知覚が再現される。この時想像が働いているのである」(I-II-II-17)。

この引用から読み取れるように、コンディヤックにおいて想像は、かつて経験し、現在は失われた具体的な「知覚」そのものを「再現」することである。想像はまた、注意によって打ち立てられる知覚のあいだの連関によって成立する。さらに想像は、ある知覚をきっかけとして受動的に引き起こされるのである。

この想像の延長上に「記憶 mémoire」が考えられる。ただし、記憶が呼び起こすものは知覚そのものではなく、あくまでも知覚の名前、知覚とともにあった状況、あるいは知覚という抽象観念であるとされる。名前は記号であり、より厳密には普通名詞に相当するだろう。

「かつて経験した知覚を私たちが常に呼び覚ます (réveiller) ことができるとは限らない。どんなに努力しても、ただその〔対象の〕名前 (nom) や、その知覚とともにあったいくつかの状況 (quelques unes des circonstances) や、ある知覚の抽象観念 (une idée abstraite de perception) しか呼び起こせ (rappeler) ない場合もある。(・・・)」(I-II-II-18)。

記憶による再生には、後段で見るように、人間が持つ人為的恣意的記号が関わるが、初め記号(名前)は呼び戻される側の事柄と位置づけられていることがわかる (Cf. 松永: 7) ⁽²⁾。続けて具体例が挙げられる。

「たとえば、その匂い (odeur) をほとんど嗅いだことのない花のことを思い浮かべる (songer à) としてみよう。人はその花の名前を呼び起こし、それを見たときの状況を思い出し、嗅覚を刺激する一つの知覚という一般観念の下でその香り (parfum) を表象さ

せることだろう。しかし、[その花の匂いの] 知覚そのもの呼び覚ますことにはならないだろう。さて、こういう結果を生み出す働きを私は記憶と呼ぶことにする⁽³⁾」(ibid.)。この連続する二つの引用に現れる「名前」、「状況」、「ある知覚の抽象観念」あるいは「嗅覚を刺激する一つの知覚という一般観念」については後段であらためて論じたい。

第 III 章「注意によって形作られる観念連関 (liaison des idées) はいかにして想像、観想、記憶を生み出すか」では、上で見た知覚の連関 (I-II-II-17) が「観念の連関」へと拡張される。ここでも連関が成立する原因は「注意」に求められるが、注意の元には「欲求」があることも確認される。

「いくつもの観念の間の連関の原因は、それらの観念が一緒に現れるときに私たちがそれらに対して払った注意をおいてほかにはない。さて、ものごとが私たちの注意を引くのは、ただ(・・・) 私たちの欲求 (besoins) との関係による。結果として、同じ注意が、いろいろな欲求の観念と、それらの欲求に関連するものごとの観念とを同時に含み、それらの観念を結びつけるのである。」(I-II-III-28)

他方、人間のさまざまな欲求は、したがって欲求についての知覚も相互に関連しており、そうした欲求についての知覚 (あるいは観念) それぞれの上に新たな連鎖が産出されていく、とされる。

「私たちのあらゆる欲求は互いに関係して (tenir à) いる。そうした欲求についての知覚は基礎的な諸観念の連なりであると見なすことができよう。これらの基礎的諸観念に、私たちの知識の部分なすあらゆるものを基づけることができよう。／この基礎的観念それぞれの上に、観念の他の鎖が成長するであろう。この鎖の力はすべて記号の類比関係の内や、諸知覚の秩序の内や、最もかけ離れた諸観念を状況が時として結びつけて作り出す連関の内に宿るのである。」(I-II-III-29)

ここで観念の連関が、「記号の類比関係」を通して、また「諸知覚の秩序」に基づいて、あるいは「状況が作り出す連関」として、生み出されるとされていることを念頭に置いておこう。

II. 記号の区別

続く第 IV 章「記号の使用が、想像、観想、記憶という働きを発展させる真の原因である」においてコンディヤックは記号の働きに踏み込む。彼は記号の種類から説き起こす。

「私は三種類の記号を区別する。1. 偶然的記号。つまり、何らかの個別の状況が私たちの何らかの観念と連関させ (lier) たもの (objet)。結果として、こうしたものはこれらの観念を呼び覚ますのに適したものとなる。2. 自然的記号。つまり、自然が喜び、恐れ、苦痛などの感情に対応させて (pour) 定めた叫び声。3. 人為的記号 (signe d'institution)。

つまり、私たち自身が選んだ記号。これは私たちの観念と恣意的な関係 (rapport) しか持たない。」(I-II-IV-35)

このように記号は、私たちの持つ観念あるいは感情と連関し、対応するもの、あるいは関係を持つものであるという。偶然的記号は、観念と「連関」した「結果として」「観念を呼び起こすのに適し」たものとなっているとされるが、この「観念を呼び起こす」働きは他の記号にも共通している。ここでの記号の分類は、記号の働きの前提となる連関が形成される仕方に関わっている。自然的記号では、連関は自然によって形成されている。他の二種の記号に関しては、連関は自然には結びついていない二つのもの間に、偶然的記号においては偶然によって、人為的記号においては人為によって形成される。松永もこれら三種の記号について、「ある経験内容が他のある内容の記号となるためには両者には前もってリエゾン (連合) 関係が成立していなければならない」と指摘している (松永: 34)。

さて、松永は続けて次のように論じる。「二つのものが必ずや結びつかなくともよいところに結びつきが生じたときにこそ、次に一方が単独で経験内容になることもあり、そのときに、それが他方を呼び出す (・・・) という記号の働きも現実化し得る」(松永: 34)。適切な指摘であると思う。この点から、連関が自然的であることで、ある感情に叫び声が常に伴ってくるのであれば、叫び声をコンディヤックが「自然的記号」とすることには疑問が生じる。「自然的記号」において連関が自然によって設定されていて、「他方が既に共に直接に知覚されているなら、それは記号によって呼び出されているのではない」(松永: 16) からである。

松永は続ける。偶然的記号と人為的記号の場合、それぞれが前提とする連関は自然に形成されているものではない。とはいえ、「連関形成を導くものが何もないか」というとそうでない。恣意的記号〔人為的記号〕の場合のもとより、偶然的記号の場合でも、(偶然と言いながら) ある知覚から他の知覚への注意の移行がリエゾン〔連関〕を作る」のだと考えられる (松永: 35) ⁽¹⁾。記号の成立には、あくまでも人間とその注意が介入していることだろう。

III. 人為的記号

人為的記号の成立については後段であらためて検討するとして、ここではまず、『起源論』第I篇第II部第IV章の内容に即して人為的記号の特徴を追っておこう。人為的記号の働きも、知覚ないし観念の連関に基づいて可能となる。このことは、「記号が観念と連関させられ」ている (I-II-IV-35)、記号と観念が「関係 rapport」を持っている (ibid.)、とされ、他方で、記号自体が知覚である側面を持つとされることから明らかになる。知覚でもある記号は、知覚の直接的想起である想像の対象でもあることになる。コンディ

ヤックは次のように述べている。

「注意しなければならないことは、関連する記号や状況だけしか思い起こせ (retracer) ない知覚との関係で私が〔記号や状況を通じての知覚の間接的な想起である〕記憶と呼ぶ働きは、呼び覚ました記号や状況との関係では〔知覚の直接的想起である〕想像なのである。なぜなら、これらの記号や状況も〔それ自体〕知覚だからである。」(I-II-II-25)。

本論文前節末尾で松永に従って、偶然的記号においても、人為的記号においても、ある知覚から他の知覚への注意の移行が連関を作るのだと考えた。ところで、偶然的記号では注意は意のままにはならない。

「偶然的記号の助けだけを頼りにしても、彼〔恣意的記号を全く使わない人〕の想像と覚え⁽¹⁾はすでに一定の働きをなしうるだろう。すなわち、ある対象を見ることで、その対象と結合した知覚が呼び覚まされることはありうる。(・・・)しかし、何らかの外的な原因のおかげで彼の目の前にこの対象が置かれるのでなければ、こういったことは起こらないであろうことに注意すべきである。そういう対象がない場合には、ここで想定している人は、自力で自分を呼び起こす (se rappeler) 手段を全く持たないだろう。というのも、そこに関係しうるいかなるものも彼は意のまま (à sa disposition) にはできないからである。」(I-II-IV-37)

ここで「自力で自分を思い起こす手段」として「意のままになる」関係するものが暗示されている。これが人為的記号であることになる。ここまでは想像にせよ、記憶にせよ、人がそれを自在に働かせることができるとは言われてこなかったが、次には、人が人為的記号を、そしてそれを通じて記憶の働きを、意のままに操作できる端緒が語られることになる。

「記憶は、(・・・) 私たちの諸観念 (nos idées) の記号や、そうした諸観念に伴った状況と呼び起こす力の中にこそ存する。そしてこの力は、私たちがたどり直そう (se retracer) とする対象 (objets) が、私たちがあらかじめ選んでおいた記号間の類比や、諸観念の間に私たちが設定しておいた秩序を通して、私たちが現に持つ欲求のどれかひとつつながっている限りでだけ発動する。最後に、あるものごとを私たちが呼び起こすことができる (nous saurions nous rappeler) のは、そのものごとがどこかで、私たちが意のまま (à notre disposition) にできることのどれかと結ばれている場合に限られる。ところで、偶然的な記号や自然的な記号しか持たない人は、自分の意のまま (à ses ordres) になる記号を全く持たない。したがって、彼のいろいろな欲求は〔受動的に知覚を思い浮かべる〕想像の発動のきっかけになることしかできない。こうして、彼は記憶を持たないはずである。」(I-II-IV-39) (強調、引用者)

具体的な知覚が偶然的記号や自然的記号として働く場合とは違って、人為的に設定された記号は「意のままに à ses ordres」呼び起こすことができよう。コンディヤックは明言

しないものの、ここで「意のまま」になるということは、具体的には、人が人為的記号を容易に操作できることを示していると思われる。人は、欲求にもとづいてこの「意のままになる記号」を用い、記号の作用を介して他の記号や状況を「呼び起こし」、「対象」を指示するのである。記憶は本来こうした、記号を「意のままにする」力であろうし、したがって記憶は記号の、それゆえ記号が指示する観念の、組み合わせをさまざまに試してみることもできよう。

これまでもふれたように、当初、知覚を思い浮かべる想像の働きはあくまでも受動的に引き起こされると考えられていた。しかし、記憶は「想像の新しい使い方」をも可能にするとされる。

「記憶が獲得されると、その人は自分で想像を意のままにし (*disposer de*) 始め、想像の新しい使い方をするようになる。なぜなら、自分の意のままに呼び起こすことができる記号に助けられて、彼はその記号に結合した諸観念をしばしば思い起こすようになり、少なくとも思い起こすことができるようになるからである」(I-II-IV-46)。

記憶が呼び起こす記号は意のままにしやすいので、人は記号を用いることで、それに結びついた観念をも意のままにできるようになる、つまり想像も意のままにできるようになる、とされている。結局、人は記号を用いることによって、意のままに「観念連関」を組み替えていくことができるのではなからうか。第II部第XI章 §107の冒頭部では、「〔観念の〕この連関が記号の使用によって生じる」と言われるが、こうした局面に注目してのことだと思われる。

IV. 人為的記号の出現

続く第V章「反省について」において、コンディヤックは、今見た記号を用いることによって人は注意を思いのままに振り向けることができるようになるとして、反省という人間精神の高次の機能の分析に踏み入っていく。しかし、人為的記号がどのように出現したかについては、いまだ十分な説明が与えられたとは言えない。コンディヤック自身、この第V章において、説明の困難を認めている。

「人為的記号を利用することができるためには、そうした記号を選び、そうした記号に諸観念を結びつけるのに十分な反省をできるように人がすでになっているのでなければならぬように思われる。そこで私に反論する人がおそらくいることだろう。どうして、こうした記号の使用によらなければ、反省の働きが獲得されないであろうか、と」(I-II-V-49)。

やや分かりにくいのが、反省が先か記号が先か、が問題にされている。この問いへのこの場での答えは、「言語の歴史を述べるときに、この難問に満足のいく答えを与えるつもり

だ」というものである。

この予告を受けて、コンディヤックは『起源論』第II篇「言語と方法について」第I部「言語の起源と進歩について」の冒頭とそれに続く第I章で「言語の歴史」を展開する。その「歴史」の叙述は次のような想定から始められる。

「〔ノアの〕大洪水の後しばらくして、男と女の二人の子供が、どんな記号の使用も知る前に砂漠の中をさまよっていたと想定してみたい。(・・・)このような出来事だけに起源を持つ国民がいないとさえ誰にも言うことはできない。このことを仮定させてもらいたい。すると、この黎明期の国民がどのように言語を作り出したかが問題になる」(II-I [冒頭部分])。

これに続く彼の言語論は、身ぶり言語 (langage d'action)、つまり最初の人為的記号の獲得から説き起こされる。

「欲求のせいで必要となったものがないために苦しんでいた人」は、苦しみの「叫び声を上げ」、「体のあらゆる部分を揺り動かした」(II-I-I-2)。「彼ら〔男女の子供〕がこれらの〔叫び声や動作という〕記号に慣れ親しむ (se familiariser) ほど、彼らはそれら〔の記号〕を思うままに (à leur gré) 呼び起こすことができるようになった。彼らの記憶が活動を始めた。彼らは自分の想像を自ら意のままに (disposer de) できるようになり、かつてはただ本能によってしていたことを、知らず知らずのうちに反省しながらするようになった。」(II-I-I-3)

叫び声や動作といった自然的記号が習慣を通じて人為的記号へ「転換」(松永: 14)するという大筋が語られたことになる。叫び声などの自然的記号は、コンディヤックにとっても、連関している痛みなどの知覚が現に存在していることの「結果 suite」(I-II-IV-38)であるにすぎない。本論文では先に、松永も参考に、こうした自然的記号は、他の知覚を呼び出す記号としては働いていないことを指摘した(本論文 p.6)。しかし今、コンディヤックはこの自然的記号を持ち出す。彼は、身ぶり言語を人為的記号の端緒であると見なし、この身ぶり言語は、痛みに伴う叫び声や身のよじりのような自然的記号からの転換として生じたと考えたのである。

この「転換」が実現する契機について、松永は次のように論じる(松永: 16以降)。記号が自分とは別のものを呼び出す働きは、記号とその別のものとの連関が前もって形成されていることを条件としている。しかし、この条件のもとで記号の働きが現実化するには、(連関形成の後で) 連関関係にある一方だけが知覚される必要がある。そこで、自然的記号が、真に記号として意味を持つためには、(1) 心身の区別を前提としつつ、さらに、(2) 他者を要求して初めて成立すると言わなければならない。「叫び声や身のよじりは肉体の運動として、魂の運動としての痛みに伴う。そして、両方の運動が本人に知覚されるのであるが、他者には前者〔肉体運動〕のみが知覚され、痛みは意味される資

格でのみ他者の経験に入り込んでくる」(松永: 17)。以上、的確な指摘であると思われる。

ここで少し長くなるが、他者との交わりにおいて人為的記号が出現する局面についてのコンディヤックの記述を確認しておこう。

「彼らが一緒に生活するようになると、これら〔注意、想像といった〕魂の初歩的な働きをそれまで以上に行使用する機会が生じてきた。というのは、彼らが相互に交流しあうことで、彼らはあれこれの情念の叫び声に、その叫び声が自然的記号となっている〔内面的な〕知覚 (perceptions)⁽¹⁾ を結びつけるようになったからである。彼らはそうした叫び声に、ふつう何らかの運動 (mouvement) やしぐさ (geste) や動作 (action) を伴わせた。これらの表現はより一層はっきり感じられるものである。たとえば、欲求のせいが必要となったものがないために苦しんでいた人は、叫び声を上げるだけではいられなかった。それを手に入れようとさまざまに努力し、頭、腕、そして体のあらゆる部分を揺り動かすのだった。」(II-I-I-2)

叫び声や動作といった自然的記号が記号として機能するためには、それらを知覚する相手の側においても、叫び声や動作と、内面の苦しみの知覚との連関が前もって形成されていることが必要であろう(松永: 17)。叫び声を聞く人も、苦しみを感ずて叫び声を上げた経験を持つ。そして、恐らくはこうした前提があって、叫び声を聞く人も共感の感情を懐くことになるかとされる。コンディヤックは続ける。

「もう一人の人はこの光景に心を動かされて、〔相手が求めている〕その当のものにじっと視線を注ぎ、まだ自分で説明できない感情が自分の心の中に生ずるのを感じ、この哀れな人が苦しむのを見て苦しみを感ずたのである。この時から、彼はその哀れな人を楽にしてやりたいと思うようになり、自分でできる範囲でこの気持ちに従うようになった。こうして、ただ本能だけによって、これらの人々は助けを求め合い、与え合ったのである。ただ本能だけによってと私は言う。なぜなら反省はまだそこに関与できなかったのだから。(・・・) 二人とも、自分たちを一層駆り立てる欲求に従って行動したのである。」(II-I-I-2)

続くパラグラフで、人為的記号の始まりは慣れや習慣に求められる。

「しかし、今見たところと同様の状況がしばしば繰り返されると、彼ら〔本能的に助けを求め、それに応えた二人〕はついには情念の叫び声や身体のだまざまな動作に、そこにこうもはっきりと表現されていた〔内面的な〕知覚を結びつけるのに慣れる (s'accoutumer) ようになった。彼らがこれらの記号に慣れ親しむ (se familiariser) ほど、彼らはそれら〔の記号〕を思うままに (à leur gré) 呼び起こすことができるようになった。彼らの記憶が活動を始めた。彼らは自分の想像を自ら意のままに (disposer de) できるようになり、かつてはただ本能によってしていたことを、知らず知らずのうちに反省しながらするよ

うになった。まず彼らは二人とも、これらの記号〔叫び声と動作〕によって、その時に相手を感じている感情を認識するという習慣 (habitude) を身につけた。次いで彼らは、自分たちが感じた感情を伝え合うためにそれらの記号を使うようになった。たとえば、自分が恐ろしい目にあった場所を見た人は、恐怖の記号である叫び声や運動を模倣して、自分が冒した危険に身をさらさないよう相手に警告しようとしたのである。」(II-I-I-3)

この引用の前半に現れる「慣れ」は叫び声や動作と内面の知覚を結びつけることについて語られている。ただし、叫び声を上げ、身体を動かす当人においては、両者は最初から結びついている。そこで、この結びつけることへの慣れは、(1) 叫び声を上げ、身体を動かす実際の経験からその人が離れ、それらの記号を独立したものとして捉える場合について、さらには、(2) それらの記号を他者(相手)が発する場合について語られていると考えられよう。実際、引用の後半で語られる「習慣」は、「相手を感じている感情」を、その記号に依拠して認識することについて語られている。この引用部分について、松永は「リエゾン〔連関〕は叫び声等を見聞きする人の中で共に生じ結びつけられるものと考えよう」(松永: 19) と述べ、この記号と内面の知覚を結合することへの慣れが複数の人間の相互の関係性の中で生じると考えるべきだと問題提起している。実際、コンディヤックは、「彼らは二人とも、これらの記号〔叫び声と動作〕によって、その時に相手を感じている感情を認識するという習慣 (habitude) を身につけた」と書いているが、この習慣が二人の人間の関係性の中で獲得されることが暗示されていると読むことも可能である。

なお、上でふれた(1) 記号の独立性については、松永も、自然的記号、つまり叫び声や動作は内面の感情と本来結びついているという前提の上に、次のように指摘している。「恣意的記号の発生に必要なのはむしろ、叫び声等を恐怖〔などの感情〕から切り離して単独にあり得るものとして経験することである。そうしてこそ〔II-I-I-3 からの〕引用文の最後に語られているごとく、現実の恐怖ではなく恐怖の観念(ないし過去の恐怖)が呼び出される可能性が生ずる。そして実に、この切り離しを密かに前提して語られているのが、私がコンディヤックのテキストに読み取らざるを得ない第二の習慣、〔叫び声や動作といった〕記号に慣れ親しむという習慣である」(松永: 20)。記号の「切り離し」の可能性は適切な指摘であると思う。あるいはむしろ、自然的記号において記号と知覚が自然的に結びついているとしても、その結びつきには初めから空隙が潜んでいると、人為的記号への可能性が開かれていると、考えられるかもしれない⁽²⁾。

一方、「記号に慣れ親しむ習慣」については、コンディヤック自身、上の引用箇所で、「彼らがこれらの記号に慣れ親しむ (se familiariser) ほど、彼らはそれら〔の記号〕を思うままに (à leur gré) 呼び起こすことができるようになった」と語っていた(強調引用者)。筆者は先に(本論文 p.8)、人為的記号が「『意のまま』になるということは、具体

的には、人が人為的記号を容易に操作できることを示している」のではないかと指摘したが、「慣れ」が「思うまま」、「意のまま」といった様態につながるとされていることから、こうした様態は結局は操作の容易さを示していると考えたのにはかならない⁽³⁾。

以上、他者との交わりにおいて自然的記号が人為的記号に転換するとして、コンディヤックは曲がりなりにも人為的記号の出現を説明したことになる。

V. 記憶

さて、ここで、コンディヤックが花の匂いの記憶を説明する際に挙げた、花の名前、知覚時の状況、匂いの一般観念、これらの吟味に議論を戻そう (Cf. I-II-II-18)。先に (本論文 p.4-5) 部分的に引用した箇所ではコンディヤックは次のように語っている。

「かつて経験した知覚を私たちが常に呼び覚ますことができるとは限らない。どんなに努力しても、ただその〔対象の〕名前や、その知覚とともにあったいくつかの状況や、ある知覚の抽象観念しか呼び起こせない場合もある。この抽象観念は私たちがたえず作りうる観念である。なぜなら、私たち自身で一般化できる知覚を意識しなければ、私たちは決してものを考えることができないだろうから。たとえば、その匂いをほとんど嗅いだことのない花のことを思い浮かべるとしてみよう。人はその花の名前を呼び起こし、それを見たときの状況を思い出し、嗅覚を刺激する一つの知覚という一般観念の下でその香りを表象させる (se représenter) ことだろう。しかし、〔その花の匂いの〕知覚そのものを呼び覚ますことにはならないだろう。さて、こうした結果を生む働きを私は記憶と呼ぶことにする。」 (I-II-II-18)

松永はこの箇所について、コンディヤックが直接語っていることを超えて、大意次のように論じている (松永: 11)⁽¹⁾。1. 花の名前 (記号) とは何であろうか。花の名前はある花の複合的で一般的な観念を表すであろう。この観念はその花の形、色、大きさ、匂い等の諸観念をある秩序で含んで形成されていよう。その秩序は、それら形や色などに向けられた注意の順序、強さ、反復の程度などにより作られた、それら形や色などの観念の連関に他ならない。つまり、記号は、注意の移り行きに伴って連関自身を表現するものになっている。そして、注意の移り行きの容易さを反映して、複合観念の内容となる諸観念のあるものとは強く、他のものとは弱く結びつく。こうした松永の議論は説得的である。ただし、コンディヤックは「名前だけしか呼び起こせない」場合に言及しているから、名前 (記号) は、内容となるべき諸観念と全体的に弱くしか結びついていない場合もあると言うべきであろう。

松永は続ける (松永: 11-12)。2. 匂いの一般観念とはどのようなものか。それは甘い匂いや刺激臭等の観念を含むことができよう。松永は次のような解釈を提案する。匂いの一般観念に含まれる諸観念は、嗅覚という感官の同一性によって秩序づけられて集め

られる。また、これら諸観念は、〈匂い〉という、感官の同一性と結託した記号なしでは、一般観念を形成するほど互いの結合関係に入ってはいかなっただろう、と。事実、コンディヤックも上の引用箇所で、「嗅覚を刺激する一つの知覚という一般観念」(I-II-II-18)と、嗅覚という感官に言及している。

最後に、3. 花の匂いを知覚した時の「いくつかの状況」とは何か。状況は、普通に考えれば花の名前とは区別され、特定の過去に関わる知覚としてあるだろう。この「いくつかの状況」は、花の名前や匂いの一般観念の下に集合する他の諸知覚・諸観念と連関関係に入り、その花をより具体的に「表象」あるいは指示するのに与るだろう。一方、上に見た1. 名前は、併存する諸知覚相互の連関を表すことによって、同様の連関が見られるあらゆる複合的知覚に結びつくことができ、かくて一般的なものの担い手になるのである (Cf. 松永: 12-13)。以上、記憶に関わる名前、状況、一般観念について、松永は強靱な思考力によって、コンディヤックの実際に語っていることの先に、事象の説得的な解釈を提出している⁽²⁾。

さて、松永も参考に、名前、一般観念、状況が呼び出される仕方について考えてみよう。まず、名前だが、名前は観念と連関した記号、実質的に観念と一体になった記号であろう (松永: 13)。また、名前と結びついた観念はいずれにせよ一般性を持つであろう。精神は主導権を持って、「意のままに」、こうした記号の連関をたどることができ、その連関に入る記号を呼び出すことができる。そのことを通じて、記号と結びついている限りの観念も呼び出すことができるのだと思われる。

一方、状況の想起は、知覚自体の想起として想像であろう。ただし、記憶を通じて、想像も「意のまま」にしうるとされていることはすでに見た (本論文 p.8)。この状況の呼び出しをなす記号が何なのかは語られていない。これについて、松永は、状況を呼び出す記号は名前であるとするのが順当であろうとし、さらに次のように続けている。「ただし、状況の名前ではなく、花の名前である。そして、まさに花の名前でしかないがゆえに (それは花の知覚とは恣意的に結びつけられたのであるが)、この名前と状況とは花の知覚が生じた過去に偶然にリエゾン [連関] を形成し、そのリエゾンのお陰で (名前が呼び出されてしまっていることを前提して) 状況が自ずと再生され得、かくてその再生は記憶でなく想像である」(松永: 14)。

次に、名前と観念について、引き続き松永を参考に考察を深めよう。

VI. 名前と観念

コンディヤックは「[諸観念の] この連関が記号の使用によって生み出される」(I-II-XI-107; 本論文 p.8) としているが、名前が観念一般の形成に関わるとははっきり語っているわけではない。松永も指摘するように、コンディヤックは、観念の集合としての複合

観念の形成を論じる場合にのみ、恣意的記号の不可欠性を示そうとしている（松永：9）。これは、この種の複合観念の形成が、諸観念の連関の形成に準じて考えられるからであろう。コンディヤックは次のように語っている。

「人間精神は非常に狭く限界づけられているので、多くの観念を思い起こして（se retracer）一挙に反省の対象にすることはできない。しかし、しばしば、いくつもの観念を一緒に考察しなければならなくなる。これを精神は記号の助けを借りて行うのである。記号は、それらの観念を結び合わせ、それらがあたかも一つの観念でしかないように精神に受け取らせるのである。」（I-IV-I-6）。

この複合観念の形成について松永は次のように指摘する。複合観念は多様な諸観念が集められ記号の助けで結合されているのであるが、そのとき、集められたものはただ束ねられていけばよいのではなく、それにはカオスの反対、秩序がなければならないとコンディヤックは考えている（本論文 p.12）、この秩序を指示するものとして記号の役割はあるのではないか（松永：10）⁽¹⁾。この点の確認の上に松永は論を進めるが、本論文では松永の議論を参考に、コンディヤックが実際に語っているところを見ていくこととしよう。

コンディヤックはロックの考えも参考に複合観念を分類しているが⁽²⁾、複合観念のどの種類であれ、複合観念の形成には記号が必要であることを示そうとしている。（1）まず、「モデルに従って」（つまり知覚される事象に即して）「さまざまな単純観念を一つの記号の下に寄せ集め」て複合観念を形成する場合（I-IV-I-7）（Cf. 松永：10）を考えてみよう。コンディヤックの語るところを、少し長くなるが引用しよう。

「〔目の前にある物体の〕これらすべての諸性質をまとめた一つの観念を私が一度で誰かに伝えることができるのでなければ、私が自分自身に対してそれらの諸性質を呼び起こすにも、それらの諸性質に私の精神の前を通過させて点検する以外に方法がないことは確かである。これらの諸性質をまとめて把握することができないので、たとえばその色だけといったように、一つの性質だけを考えようとすれば、このように不完全な観念は私の役に立たないであろうし、この点〔色〕に関して似ている他の物体とこの物体を私はしばしば混同してしまうだろう。こういった困った状態から抜け出すために、私は〔たとえば〕金^{オール}という言葉を作り出し、かつて列挙したこれらすべての観念をこの言葉に結びつけることに慣れていく。やがて金の概念について考えても、金^{オール}という音声と、一定の数の単純観念をこの音声に結合したことがあったという思い出しか頭に浮かんでこないようになるだろう。この一定の数の単純観念を一挙に呼び覚ますことはできないが、私はそれらの単純観念が同一の基体（sujet）の内に共存するのを見たのだし、しようと思えば、それらの単純観念を順に呼び起こすこともできるだろう。」（I-IV-I-7）

基体（この場合は金）の中に共存的にあるさまざまな性質は、注意によって順次、単

純観念として知覚され、それらの単純観念相互の共存的秩序は、一つの記号の下で複合観念の内部に再現される。記号はこの「注意の系列」(松永：10)、すなわち観念の秩序、を指示する限りで複合観念の名前であると解釈できよう。

(2) 次にコンディヤックは、原型的観念⁽²⁾など、「モデルなしに作られる複合観念」について語る。

「私たちがモデルなしに作り上げる複合観念 (*idée complexe*) では、記号の必要性は一層はっきりと感じられる。原型的概念 (*notion archétype*) においてはふつうであるように、どこでも結びついては見かけることがない諸観念を集めた時、それら観念の集合が漏れ出てしまうのを防ぐ紐帯のようなものである言葉にそうした集合を結びつけるなら、何がその集合を固定するかは明らかである。もし名前は自分には不要だと思えば、記憶からこうした名前をはぎ取ってみたまえ。そして、民法や道德律、徳や悪徳、ひいては人間のあらゆる行為について反省してみたまえ。そうすれば自分の誤りに気づくだろう。認めてもらえようが、あなたが作る各々の〔観念の〕組み合わせについて、あなたが集めようとした一定数の単純観念を確定するために記号を持たないならば、一歩踏み出したとたんにもはや混沌しか目に入らないことだろう。」(I-IV-I-8)

このタイプの複合観念の成立はまったく人為に依存している。ここから類推できることだが、いずれのタイプにせよ、複合観念を表す記号(名前)は、既存の複合観念と関連しているというより、むしろ、「いくつもの観念」を「結び合わせ」(I-IV-I-6; 本論文 p.14) しているのだと考えられるのではなかろうか。つまり、諸観念のそれぞれと関連しつつ、それらの観念同士の連関を作り出しているのではなかろうか (Cf. 松永：9)。

(3) 最後に、抽象観念ないし一般観念を考えよう。松永は「一般観念の形成を、複合観念の形成について〔コンディヤックによって〕述べられることに倣って考え」とするが(松永：10)、適切な対応であると思われる。コンディヤックは抽象作用について第I篇第V部を立て、そこで次のように語っている。

「この種の観念〔抽象観念 *idée abstraite*〕は、相互に似通っている部分 (*endroits*) においてもものごと (*choses*) を眺めて、それらのものごとに私たちが与えた名称 (*dénomination*) でしかない。だから、それは一般観念 (*idée générale*) と呼ばれるのである。」(I-V-1)

「たぶん抽象観念は絶対に必要なものなのだ。人はものごと (*choses*) について、それらが異なっているか、適合しているかに応じて語らなければならないから、記号によって区別された種類 (*classes*) にもものごとを関係づける (*rapporter*) こと〔つまり一般観念を持つこと〕が人に可能になっていなければならなかった」(I-V-2)。

二つ目の引用で見て取れるように、一般観念も、先に見た二種類の複合観念と同じく、諸知覚・諸観念を「関係づける」ことによって成り立つであろうが、一般観念の場合は、「相互に似通っている部分」、共通性の観点から諸事物を同じ「種類」に属するものとし

て関係づけることで成立するであろう。一般観念の記号は、その共通性——一種の秩序——を表現することになろう (Cf. 松永: 10) ⁽³⁾。

さて、コンディヤックは観念を「印象についてのイマージュとしての認識 la connaissance qu'on en prend comme image (de l'impression)」(I-III-16) と定義する場合がある (松永: 9)。コンディヤックはさまざまな術語の使い分けを説明して次のように言う。

「対象を前にして私たちの内に生じる印象を知覚 (perception) と呼ぶ。感官をとおしてやって来る限り、その同じ印象を感覚 (sensation) と呼ぶ。こうした印象についての認識を意識 (conscience) と呼ぶ。こうした印象についてのイマージュとしての認識を観念 (idée) と呼ぶ。私たち自身が作り上げたものとしてのあらゆる観念を概念 (notion) と呼ぶ」(I-III-16)。

これについてはどう理解すべきであろうか。松永は、次のように論じる (松永: 11)。恣意的記号は特定の知覚に貼り付いたままでは無く、その知覚が生じる際に働く秩序を表現することで、同じような秩序を持つ複数の知覚を表現できる。こうして、名付けられた知覚は一般性を帯びる、と。つまり、記号と結びついた知覚は一般観念の性格を帯びるであろう。ここから松永は次のように続ける。その一般性から改めて特定の実在的な知覚が見られると、名付けられた知覚と実在的である知覚との間には表象関係があると語られることになる。この名づけられた知覚が観念と呼ばれる、と。この表象作用こそがイマージュと呼ばれるものであろう。極めて説得的な優れた解釈であると思われる。

なお、コンディヤックは同じ節で次のようにも言っている。

「彼ら〔反省能力のない獣などの存在〕にとっては知覚でしかないものが、私たち〔人間〕にとっては観念になるのであるが、それは、この知覚が何かの事物を表象している (représenter) のだと私たちが反省することによってである」(I-III-16)。

ここでの「反省」は「認識」といった程度の意味であろう。結局、事物を「表象」しているという意識を伴う知覚が観念であることになろう。かくして、記号の出現が、魂が持つ知覚作用の余白に、観念——一般 (抽象) 観念を含む複合観念——を、意識とともに生み出していくのではなかろうか。

VII. 人為的記号の展開

本論文第 IV 節で見たように、コンディヤックは、人為的記号の出現を説明しようとして、他者との交わりにおいて自然的記号が人為的記号に転換するとした。一方、本論文第 III 節で、『起源論』第 I 篇第 II 部第 IV 章の内容に関連して述べたように、人為的に

設定された記号は「意のままに」呼び起こすことができるとされた。「意のまま」になるということは、具体的には、人が人為的記号を容易に操作できることを示していると思われた。人は、欲求にもとづいてこの「意のままになる記号」を用い、その記号の作用を介して他の記号を呼び起こし、さらには記号に結びついた観念をも呼び出すのだと思われる。これを受けて、本節では、『起源論』第I篇第II部第V章「反省について」で展開される、人為的記号を介した精神の働きの発展のあり方を再確認しておこう⁽¹⁾。

第V章では、記号を意のままに呼び起こすことができることの影響が「注意」の働きに即して語られる。注意の基本的な働きについては本論文第I節で『起源論』第I篇第II部の第II章と第III章を検討した際にも見た (p.4, p.5)。意のままになる記号と記憶の助けによって、この注意も思いのままに振り向けることができるようになるという。「記憶という働きが形成され、自分の力に基づいて想像が発揮されるようになる」と、魂は「魂に作用するあらゆる対象への依存状態」から「抜け出し」て、注意を「意のままにできる *disposer de*」ようになることとされる (I-II-V-47)。そしてコンディヤックは次のように続ける。

「たとえば一枚の絵を前にするとき、私たちは、自然や自然を模倣する際の規則について自分が持っている知識を思い出す。そして私たちはこの絵からその知識へと、またその知識からこの絵へと、(・・・) 注意を順に振り向ける」 (I-II-V-47)。

ここでは観念はすでに、「知識」を構成する知的な複合観念をも含意していよう。このように、知的観念を含むさまざまな観念に意のままに注意を振り向けることがとりもなおさず「反省」であることになる。コンディヤックは言う。

「私たち自身で、注意をさまざまな対象に、あるいは一つの対象のいろいろな部分に交互に振り向けるやり方が、反省 (*réfléchir*) と呼ばれるものである」 (I-II-V-48)。

『起源論』の後段では、「反省 (*réflexion*)、つまり私たちの注意を自分自身で意のままにする (*disposer de*) 力」ともされている (I-II-VI-55)。

このように反省に初めて言及した後、続く § 49 では、第I篇第I部第IV章 § 46 を検討した際に見たところ (本論文 p.8) に続いて、制御できる想像に関連して記号を論じている。

「想像の行使を制御し (*se rendre maître de*) 始めるには、記憶が始まれば十分である。一つの観念を自分で呼び覚ますことができるには、恣意的記号がただ一つあれば十分である。明らかにここに、記憶と、人が想像に対して持つことのできる力との最初で最低限の度合いがある。この度合いが私たちに与えてくれる、私たちの注意を意のままにする力は可能なかぎり最も弱いものだ。しかし、そうであっても、この力によって人は記号の利点を感じ始める。その結果、この力によって、新しい記号を案出することが有益あるいは必要になるような、少なくとも一つのきっかけを人はつかむのである。このこ

とを通して、この力は記憶と想像がより多く行使されるようにするだろう。したがって、反省もより多く行使されるようになるだろう。」(I-II-V-49)

原因から結果へと並べ直せば、人為的記号→記憶(制御しうる想像)→反省という道筋が確認できる。人は記号を使うことで観念の記憶・保存を実現するが、加えて人は「新しい記号を案出」することで、観念そして知識の拡張、体系化を進めていくのではなかろうか。この新しい記号を案出することは、新しい複合観念を生み出すことでもあり、諸観念の新しい連関を生み出すことでもあろう(本論文 p.5 参照)。本論文第 III 節で『起源論』第 I 篇第 II 部第 IV 章に関連して指摘した(p.8) のと同様に、精神のさらなる発展の局面でも「この〔観念の〕連関は記号の使用によって生じる」のである。結局、人は記号を用いることによって、意のままに知識の体系化を進めていくことができよう⁽²⁾。

かくしてコンディヤックは次のように語るのである。

「〔記号の働きを通じて〕魂が自らの注意〔という働き〕の主となり、自らの欲望に従ってこの注意を導くことができれば、そのとき魂は自分自身を意のままにし、自分だけに由来する観念を自分自身から引き出し、自分自身の蓄えで自らを豊かにできるようになるのである」(I-II-V-51)。

むすび

『起源論』におけるコンディヤックは、人間の認識能力の発展を跡づけ、その可能性を示すことに関心を寄せている。彼はまず、人間の精神の働きの原理として観念相互の連関を確認する(本論文第 I 節)。次いで、彼が注目するのは、人が意のままにできる記憶とそこで働く記号である。人為的に設定された記号を人は容易に、「意のままに」操作できる。人は、欲求にもとづいてこの「意のままになる記号」を用い、その記号の作用を介して他の記号や状況を呼び起こし、さらには記号に結びついた観念をも呼び出すであろう(第 III 節)。コンディヤックは、この人為的記号の出現を説明しようとして、他者との交わりの中で自然的記号が人為的記号に転換するとした(第 IV 節)。

記号としての名前の働きについて言えば、それは知覚や観念の連関を表すことによって、同様の連関が確認されるあらゆる複合した知覚や観念に結びつくことができ、かくて一般的なものの担い手になる(第 V 節)。言い換えれば、複合観念においては多様な諸観念が記号の助けで結びついているが、集められたものには秩序があり、この秩序を指示するものとして記号の役割はあるのではないか。なお、記号と結びついた、一般性を帯びた観念は、実在の事物を「表象」しているという意識を伴うであろう(第 VI 節)。

記号は観念の記憶・保存を可能にする。そして、人はさらに「新しい記号を案出」することで、観念そして知識の拡張、体系化を進めていくのではなかろうか。この新しい記号を案出することは、新しい複合観念を生み出すことでもあり、諸観念の新しい連関

を生み出すことでもあろう。「この観念の連関は記号の使用によって生じる」のである。結局、人は記号を用いることによって、意のままに知識の体系化を進めていくことができよう（第 VII 節）。総じて記号が人間的認識を可能にすると言えるであろう。

コンディヤックの記号論は、『起源論』以後の著作においても展開される。コンディヤックが十分自覚していたかどうかは検証が必要であろうが、『起源論』における記号論の不十分性を乗り越えようとする努力が、『論理学』などの後の著作でなされることになる。この点の検討は、機会をあらためて行う予定である。

注

はじめに

- (1) 名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第 XXXV 巻第 1 号、2013 年 9 月。
- (2) 『哲学雑誌』第 106 巻第 778 号、1991 年 10 月（『哲学史を読む II』〔東信堂、2008 年 6 月〕に再録）。
- (3) 『西洋における言語観の変遷の研究』文部省科学研究費共同研究報告、1992 年 3 月（『哲学史を読む II』〔東信堂、2008 年 6 月〕に再録）。
- (4) コンディヤックの記号論を考察する際の視点の多くを筆者は松永に負っており、それは本論文中であふれている通りである。解釈の細部の差は論文中では断りきれないので、併せて松永論文も参照されたい。また、本論文では論及できないが、山口裕之の研究『コンディヤックの思想 哲学と科学のはざままで』（参考文献欄参照）も松永を参照しつつコンディヤックにおける観念や記号を論じている。

I.

- (1) 本論文で特に指定のない引用は『人間知識起源論』からのものである。『人間知識起源論』への参照指示は、ローマ数字によって順に partie（篇）、section（部）、chapitre（章）を示し、次にアラビア数字によってパラグラフを示して、I-II-III-4 のように表示する。岩波文庫の邦訳（『人間知識起源論』）では、同じ区分を順に部、章、節と訳しているので注意されたい。引用の訳文は、筆者が訳し直した。引用中の〔 〕の中は筆者による補足、／は原文の改行箇所である。
- (2) 以下、松永の研究への参照指示は、本文中でこの形式で上掲『哲学史を読む II』のページ数を示す。
- (3) とはいえ、コンディヤックは想像と記憶の間に本質的な違いは認めていない。「注意しなければならぬことは、関連する記号や状況だけしか思い起こせ (retracer) ない知覚〔そのもの〕との関係で私が記憶と呼ぶ当の働きは、呼び覚ました (réveiller) 記号や状況との関係では想像なのである。なぜなら、これらの記号や状況も〔それ自体〕知覚だからである。」(I-II-II-25) この箇所については本論文 p.7 も参照のこと。

II.

- (1) 本論文 I, p.5 の引用も参照のこと。「いくつもの観念の間の連関の原因は、それらの観念が一緒

に現れるときに私たちがそれらに対して払った注意をおいてほかにはない。(・・・) 結果として、同じ注意が、いろいろな欲求の観念と、それらの欲求に関連するものごとの観念を同時に含み、それらの観念を結びつけるのである。」(I-II-III-28, 再掲)

III.

(1) 「覚え」の原語は *réminiscence*。魂のこの働きは、知覚に付随する〈その知覚に覚えがあるという意識〉であろう。拙論「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描」p.21 参照。

IV.

(1) ここでの「知覚」とは、苦しみなどの内面的な知覚を指していると思われる。そう考えるべき根拠としては、後段で「[情念の叫び声や身体さまざまな動作に] はっきりと表現されていた知覚」として同じ「知覚」という言葉が使われていることがある(二つ次の引用箇所参照)。

(2) 松永も指摘するように、この切り離しはコンディヤックによって自覚的に「説明されてはいない」(松永: 20)。また、他方で松永は、「叫び等を見聞きする人の知覚と、彼に共感的に発生する恐怖等の結びつきもまた自然的なもので、結びつきは習慣を必要とせず最初からあるのではないか」(松永: 19)として、叫び等を見聞きする人の側で、「記号と記号によって指示されるものとのリエゾンがこれから習慣によって形成される」ことは「不要」としてしている。この点については、筆者は松永と見解を異にする。あくまでも、相手が発する(叫び声等の)記号と、相手が経験していると推測される感情(自分が経験したことのある感情と同様であると推測される感情)との結びつきは、記号を見聞きする人の中で新たに形成されるものと考えたい。

なお、記号と知覚の連関に潜む空隙については、デリダによる、記号の可能性についての議論による補足が可能であろう。

(3) 「記号に慣れ親しむという習慣」については、本論文 p.17 の I-II-V-49 からの引用とそれにかかわる議論も参照されたい。

V.

(1) 以下、松永澄夫『哲学史を読む II』、「13 コンディヤックの記号論、(5) 記憶において働くリエゾンの秩序」(同書 p.11 以下)を参照しつつ論じる。日本語の用語は、本論文の他の部分と整合されるため、適宜変更した。

(2) 松永は次のようにも言う(松永: 13)。名前すなわち記号は、諸観念の集まりの秩序(すなわちある連関形成)を導く原理として(だから他の連関から当の連関を区別する原理として)働いており、一般的なものとして匂いや形や色を他から区別するという必要最小限のことは、匂いや形などの個別的内容の一端は必ずしも現われる必要はなくて、果たされる。コンディヤックも恣意的記号の本質的働きを(観念の呼び起こしとともに)観念を区別することに見るとき、この事情を念頭においていると思われる。「あなたが作る各々の〔観念の〕組み合わせについて、あなたが集めようとした一定数の単純観念を確定するために記号を持たないならば、一歩踏み出したとたんにもはや混沌しか目に入らないことだろう」(I-IV-I-8; 再掲)。

VI.

(1) 実際、自然数を表す記号の場合では、記号が加算という秩序ある手続きを指示していることを

松永は示している (I-IV-I-1)。

(2) コンディヤックは『起源論』第 I 篇第 III 部で観念を分類している。彼はまず観念を、「いくつもの知覚の結合 *réunion* あるいは集合 *collection*」である複合観念と、「まったく単一であると見なされる知覚」である単純観念とに分ける (I-III-1)。単純観念は知覚に他ならない (I-III-6)。次いで、複合観念を、「さまざまな異なる知覚から組み立てられた」複合観念と、「均質な知覚から組み立てられた」複合観念に分ける (I-III-4)。さらに、前者について、「実体の概念 *notion de substance*」と「原型的観念 *idée archétype*」とを区別する (I-III-5)。後者は、「人間のさまざまな行為に関わる複数の単純観念から組み立てられた概念」である。(実体以外の事象の観念もあるのではないと思われるが、コンディヤックはそうした観念については語っていない。)

一方、そもそも観念とは何か。コンディヤックは「対象が現前する際に私たちの内に生じる印象」を知覚 (*perception*) と呼び、「その同じ印象」が「感官をとおしてやって来る限り」感覚 (*sensation*) と呼ぶ。こうした「印象についてのイメージとしての認識」を観念 (*idée*) と呼ぶ (I-III-16)。他方で、「私たちが自分自身で作り上げた作品であるようなあらゆる観念」は「概念」と呼ばれる。ただし、「概念はイメージとも見なされうる」ので、「イメージと見なされたこういう概念に、観念という名前を付けることはできる」とされる (I-III-16)。この「イメージとしての認識」については本論で論じる。

(3) コンディヤックはまた抽象的観念を単純観念に引き付けて考えるような論点も提出している (I-V-7; Cf. 松永: 8)。コンディヤックによれば抽象観念は「感覚と反省によって得られる単純観念の一定の集合」である。ある実体に変化をこうむった場合、この実体は同じ種に属するか、と哲学者たちは問い続けている。しかし、この問いに対しては、それまで実在視されていた「実体や種の問題 [*notion* 抽象観念] を、単純観念のさまざまな集合に置き直し」てみるべきなのである。例えば「氷や雪は水か、奇胎は人間か、神、精神、物体あるいはさらに真空は実体か」といった問いは、「これらの事物は、水、人間、実体といった言葉の下に集められたいろいろな単純観念と一致するか」と問うべきである。「これらの事物が、水、人間、実体といった言葉が意味すると思われるさまざまな本質、さまざまな実在性を含むか」どうかを知ればよいのであり、問いは自ずと解決するのである。

VII.

(1) 以下の内容は、拙論「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描」で論じた内容に従っている (同論文 p.10-11 参照)。

(2) 第 VI 章では、反省の働きの「結果」として、観念を対象とする「区別」、「抽象」、「比較」、「構成」、「分解」といった働きが生まれてくると語られる。次いで第 VII 章では、こうした魂のさまざまな働きが「分析」の働きとして整理される。第 VIII 章では、二つの観念が同じであることを表す「肯定」、同じではないことを表す「否定」、両者を合わせた「判断」といった働きが示され、「推論」は互いに依存する判断の連鎖のことであるとされる (I-II-VIII-69, 70)。第 VIII 章では、これまでに見た働きのいくつかを働かせることで、私たちは事物について正確な諸観念を作り上げ、それら諸観念の間の関係を認識しているとされ、そうした諸観念について私たちが持つ意識が「概念化する *concevoir*」という働きである、とされる (I-II-VIII-72)。さらに、「知性 *entendement*」は、知覚から概念化までの「魂のさまざまな働きの集合 *collection* ないし組み合わせ *combinaison*」であるとされる (I-II-VIII-73)

補論の意味合いの第 IX 章と第 X 章を経て、第 XI 章においてコンディヤックは「理性 *raison*」へと

到達する。理性は「人間の魂のさまざまな働きを調整する仕方についての認識 *connaissance*」 (§ 92) であり、「魂のさまざまな働きを賢明に導く手段 *moyens*」 (§ 93) であるとされる。

参考文献

松永澄夫『哲学史を読む II』、東信堂、2008年。

Martine Pécharman, « Signification et langage dans l'Essai de Condillac », in *Revue de Métaphysique et de Morale*, Janvier-Mars 1999, p.81-103.

山口裕之『コンディヤックの思想——哲学と科学のはざままで』、勁草書房、2002年。

飯野和夫「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描——『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXXV巻第1号、2013年、p.3-31.

飯野和夫「コンディヤックの動的人間観——欲求の理論とその展開——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXXIII巻第2号、2012年、p.3-26.

飯野和夫「デリダのコンディヤック読解——自同性の問題を中心に——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXX巻第2号、2009年、p.21-52.